

もっと
福井の魅力を
知ってほしい
から・・・

ふくいのもつ 魅力探訪

ふくいの“お宝”ひとくちメモ

寄稿：福井県ふるさと文学館



多くの文人を魅了した「越前がに」は小説などでも描かれている

VOL.05 冬の味覚の王様「越前がに」

福井の冬の味覚の王様といえ「越前がに」だろう。身がぎつしりと詰まった雄のズワイ、濃厚な内子とツブツブの外子をもった雌のセイコ、甲羅が柔らかく食べやすい水ガニと、それぞれの味わいがある。福井県は港から漁場が近く、生きたままのかにを持ち帰ることができると、鮮度が抜群だ。一九八九年には福井県の魚に指定されている。



黄色のタグは福井県産の証

松平春嶽も贈った

「越前がに」という名称は、古くは中世の公卿の日記『実隆公記』に見える。一五一一（永正八）年三月二十日の記録に「越前蟹」が登場する。

江戸享保年間に藩内の産物をまとめた『越前国福井領産物』

にも、蟹が記されている。幕末期に前福井藩主の松平春嶽が前土佐藩主の山内容堂に越前産の蟹を贈ったことがわかる記録も残っている。

明治期になると、一九一〇（明治四四）年一月一日の『福井新聞』に、その前年に丹生郡四箇浦（現・越前町）から取り寄せた新鮮な蟹を東宮御所に献上した記事がある。これが福井県から皇室に蟹を献上した始まりとされている。

越前がにと文人

美味しい越前がには、多くの文人たちも虜にできた。

坂井市丸岡出身の中野重治は、「手をよごしむさぼり食うのが格別だ」とエッセイ「すこし昔の、ある在所のこと」に綴った。三国出身の高見順は、自宅で開く新年会に三国から蟹を取り寄せた。『続高見順日記第一巻』には、悪天候のため蟹が届かずがっかりしたことを書いてある。太平洋戦争中に三国に疎開した三好達治も、蟹を愛

した人である。その殻を花のように撒きちらかして食した。

小説やルポルタージュで知られる開高健は、著書『開口一番』などに越前がにの魅力を余すことなく綴った。その文章に思わず生唾を飲み込む。評論家の小林秀雄は、せいこがにの炊き込みご飯を好んだ。

福井県ふるさと文学館では、展示「かに！カニ！蟹！」を二月二一日まで開催しており、エッセイや小説に描かれた越前がにの魅力を紹介している。この冬は、ぜひ文学でふるさと自慢の味を堪能してはいかがだろうか。



越前がにが描かれたエッセイ、小説